

『全体性と無限』における「超越論的なもの」

—レヴィナスの「地平」概念解釈にもとづいて—

教育学コース 平石晃樹

Le “transcendantal” dans *Totalité et Infini* :
—Base sur l’interprétation lévinassienne du concept “horizon”—

Koki HIRAISHI

Cet article a pour but de dégager le sens caché du *transcendantal* chez Emmanuel Lévinas. Certes, il nous semble que la pensée de Lévinas s’oppose à la philosophie transcendantale, parce que, pour Lévinas, celle-ci n’est rien d’autre que la philosophie du Même. Mais, au fait, dans la mesure où il décrit non seulement l’expérience éthique, mais aussi la condition subjective et a priori de cette expérience, le transcendantal est très important pour Lévinas, ne fût-ce qu’implicitement.

Cet article est divisé en deux chapitres. D’abord, je analyserai l’interprétation lévinassienne du concept “horizon” de la phénoménologie husserlienne. Ensuite, j’examinerai comment cette interprétation est reprise par Lévinas dans *Totalité et Infini*. Enfin, je montrerai que Levinas nous amène à la dimension où la dichotomie du transcendantal et de l’empirique n’est plus valable.

目次

1. はじめに——レヴィナスと「超越論的なもの」
2. 現象学と超越論的なものの刷新——レヴィナスの「地平」概念解釈
3. 超越論的なものの形而上学——レヴィナスのコギト解釈
4. おわりに——今後の課題

1. はじめに——レヴィナスと「超越論的なもの」

レヴィナスの主著のひとつである『全体性と無限』は、「経験主義 (l’empirisme)」の哲学と評されることがある¹。実際、同書においてレヴィナス自身、「私たちのアприオリな基底から到来するのではない」他者と私とのかわりを「すぐれた意味での経験 (l’expérience par excellence)」と呼び²、そうした経験から、概念にもとづく意識の表象作用や言語などといった経験を成り立たせるアприオリなもの的一切をもとづける「根底的な経験主義 (l’empirisme radical)」³を標榜している。

しかし他方で、『全体性と無限』においては、レヴィナスその人が「主体性を擁護する一書」⁴と銘うっているように、そうした「すぐれた意味での経験」が成り立つための主観的な条件についても大幅な記述が割

かれている。この事実、他者についての経験を所与のものとするのではなく、その経験の可能性のアリオリな主観的条件を探ろうとしている点において、いわゆる超越論的哲学とレヴィナスの親近性を示唆するものであるといえる。

そこで本論では、『全体性と無限』において、経験を可能にする「超越論的なもの (le transcendantal)」の位相がどのようにして確保されているかを明らかにすることを目的とする。この課題は、しかし、さまざまなような困難をかかえこむことになる。第一に、『全体性と無限』においては「超越論的なもの」という措辞は肯定的な意味あいでは用いられていない以上⁵、この問いに着手する際の糸口を『全体性と無限』のうちに直接求めることはできない。そして第二に、「超越論的なもの」は「超越論的な (transcendantal)」という形容詞に定冠詞をつけて名詞化したものであるが、通常は、例えば「超越論的哲学」、「超越論的態度」、「超越論的主観」といったように、形容詞として使用されることのほうが多く、この形容詞をそれが修飾する諸々の名詞から離して独立した考察の対象となると抽象度が著しく上ってしまうことになる。

このような事情から、本論では、以下のような手順をふむことにする。まず、「超越論的なもの」を「経験的なもの」を可能にするアリオリな条件という意

味でさしあたりは操作的に規定する。そして、この「超越論的なもの」の意味をレヴィナスの思考にそくして具体化するための参照軸を、フッサール現象学によって見いだされた意識の地平構造にたいするレヴィナスの解釈の変遷のうちにもとめることにする。この意識の「地平 (horizon, Horizont)」構造は、1950年代にレヴィナスがフッサールを再受容するなかでその重要性を認められ、『全体性と無限』においても部分的には引きつがれるほどレヴィナスの思考に多大な影響を与えたものであり⁶、件の課題を遂行するうえで好適な題材となるだろう。

2. 現象学と超越論的なものの刷新——レヴィナスの「地平」概念解釈

『全体性と無限』の刊行に2年先だつ1959年、レヴィナスは、あいついで三本のフッサール現象学に関する論考を発表する。そのうちの一つ、「表象の没落」において、注目すべきことに、レヴィナスは次のような「超越論的なもの」にたいする肯定的な見解を述べている。すなわち、「超越論的なもの (le transcendantal)」という概念そのものの刷新こそが「現象学の非常に重要な (essentiel) 貢献」であり、そのことにより、「《同》 (le « Mème »)」によってあらゆる《他》 (l'« Autre »)」を吸収すること、ないしはあらゆる《他》を《同》を出発点として演繹することと同一視されてきた哲学の概念そのものの変更が生じ、結果、《他》の他性を篡奪することなく《他》と《同》との「関係 (relation)」を思考するという、「哲学における新たなスタイル」の可能が開かれた、とレヴィナスは指摘するのである⁷。「《同》」と「《他》」という『全体性と無限』で導入される対概念がすでに登場していることから示唆されるように、この指摘からは、現象学において「刷新」されたとされる「超越論的なもの」と、『全体性と無限』で展開されることになる他なるものをめぐる思考との積極的な連関がうかがえよう。

さて、レヴィナスは、フッサールにおける地平概念に依拠しながら上の見解を具体的に展開させている。レヴィナスが検討対象とするのは、『デカルト的省察』の第二十節における次のテーゼである。すなわち、「意識としてのコギトはすべて、広い意味で思念されたものについての思念ではあるが、それぞれの瞬間に思念されたものは、それぞれの瞬間に顕在的に思念されたものとして現前しているものより以上のもの (より多くのものをもって思念されたもの) である」⁸。

例えば眼前に置かれた一冊の本を知覚するとき、意識によって顕在的に思念されているのは、当の本のおもて表紙にすぎない。だが、顕在的に知覚されたある立体の一面がほかならぬ「本のおもて表紙」として知覚されるからには、その顕在的知覚には同時に、当の本のうら表紙や背表紙などについての、「ともに思念されている (mitgemeint)」が、まだ知覚されてはならず、ただ予期において、さしあたりは、非直観的な空虚において予想された側面⁹が属していなければならない。さらには、例えばもっと近づいてよりよく見てみたり、あるいは本をひっくり返し今度はうら表紙を顕在的に知覚したりすることで、かつての空虚な予期を充実させるという「別の知覚の可能性」¹⁰もまた伴われていよう。このようなことから、「みずからを越えて思念すること (Über-sich-hinaus-meinen)」¹¹ないし「より多く思念すること (Mehrmeinung)」¹²が「意識の本質的な契機」¹³とみなされねばならない。より端的に言えば、意識の「すべての顕在性はそれぞれ潜在性を含んでいる」¹⁴のである。そして、この顕在的な意識に潜在する超過ないし余剰をフッサールは「地平」という言葉で術語化するのである。

レヴィナスがフッサールの地平概念に着目するのは、意識の地平が対象の経験を可能ならしめる超越論的な領域として機能するからにほかならない。地平は、素朴に対象へと直行する自然的態度のうちにとどまる意識にとってはおろか、そうした態度を遮断し、与えられた対象を意味として構成するノエシスとノエマとの志向的相関関係をたんに分析することによっても見いださないうま、つねにすでに「匿名的 (anonym)」¹⁵に機能している。フッサールは匿名的に機能している「この新たな領域 (domaine) を発見した」¹⁶のであった。

だが、この発見の新しさは、たんに今まで見過ごされていた対象の経験の超越論的な条件に光が当てられたということ尽きるのではない。レヴィナスは、地平として見いだされた意識の潜在性は、明瞭で顕在的な意識の「たんなる《欠陥 (déficience)》や《転倒 (chute)》」¹⁷、あるいは「弱められ緩められた《顕在的なもの》」¹⁸を意味するのではないと注意したうえで、次のように述べている。

「フッサールがその具体的な分析によって例証していること、それは、対象へとむかう思惟は、ノエマ的な諸地平 (des horizons noématiques) に通じる思惟を内包しているということである。このノエマ的

な諸地平は、対象への主体の運動においてすでに主体を支え (*supposer*)、結果として、主体の主体としての「はたらき (*son œuvre de sujet*)」において主体を補強し、超越論的な役割をはたす (*jouer un rôle transcendantal*) ののである。¹⁹

これまでの記述にしたがえば、「より多くを思念する」こととして特徴づけられた意識の地平構造は、周知のフッサールの用語法でいうと、ノエシスの側に割当てられるものである。一節によれば、しかし、潜在的な意識の働きは、「ノエマ的な諸地平」へと通じ、しかもこの「ノエマ的な諸地平」は、ノエシスによって構成されるのではなく、逆に、ノエシスとしての主体を「支え」「補強」する「超越論的な役割」をはたしているとされるのである。

レヴィナスはそうしたノエマ的地平の一例として「私の身体 (*mon corps*)」²⁰をあげる。一冊の本の知覚には、先にもふれたように、実際に手でその本をもちあげひっくり返したりさらに歩み寄ったりする身体の可能性についての意識を伴っていた。またそもそも、本が「そこ」に知覚されるためには、自己の身体を基点とする「ここ」と「そこ」との局所化が生じていなければならない。したがって、「私の身体は、たんに知覚される対象であるのみならず、知覚する主体でもある」²¹ことになるだろう。

このように、意識の地平として見いだされた新たな領域は、ノエシスとノエマ、あるいは主観と客観という二分法がもはや成りたず、「構成された存在がそれ自身の構成を条件づける」²²ような次元をも新たに開示する。だから、地平が超越論的な機能をはたすといっても、そのときの地平の超越論性は、主観による客観の、あるいは意識による対象の一方的な条件づけを指すのではなく、むしろ逆に、そのような二分法の破綻を告知するのである。そして、レヴィナスはこのことのうちにこそ「超越論的なもの」の新たな規定を見いだしたのである。

次いでレヴィナスは、超越論的なものの刷新の帰結を二点にわたって整理する。まず、「潜在性のうちに意識の顕在性を条件づけることにより、表象の覇権 (*la souveraineté de la représentation*) が危機にさらされることになる」²³。レヴィナスによれば、主体と対象との関係は、古典的には、対象の現前 (*présence*) と主体の対象のもとでの現前とを前提とすることで考えられてきた。主体と対象がともに現在すること (*présent*) に両者の関係が還元されるのであれば、対象は主体に

よって顕在的に思惟されるものと合致し、主体と対象との関係は「このような透明で顕在的な現在することを永遠に再開する」²⁴ことでとりむすばれることになる。したがって対象の主体への現前は、つねに「語の語源的な意味で再一現在化すること=表象すること (*re-présentation*)」²⁵に帰着することになる。だが、意識の地平構造の発見により、このような発想は「ひとつの抽象」²⁶にすぎないことが判明する。

「表象の覇権」がこのように危機にさらされることは、しかし、観念論から実在論への揺り戻しを意味するのではない。換言すれば、思惟された対象を一方的に構成する権能が意識から奪われたからといって、今度は逆に、意識が所与のたんなる反映体へと切りつめられるわけではないのである。「存在は思惟のうちにあるのでもなければ思惟の外にあるのでもなく、むしろ、思惟そのものがみずからの外にある以上、私たちは観念論と実在論との彼方にいる」²⁷。そうであれば、「表象の没落」は、「臆見に抗することのうちで現われ」、「自己の完全なる所有の瞬間をみざすかのように知恵 (*sagesse*) をみざしてきた」これまでの「哲学の方針まるごとの終焉」をも導くことになるだろう²⁸。古来より、哲学においては、臆見への囚われから脱し、明晰にして判明な観念を獲得することが真理への道程と考えられてきた。レヴィナスによれば、そのような発想そのものは、思惟が、「表象されたもの (*le représenté*)」において不明瞭な (*implicite*) ものを明瞭にする」「全的な顕在化の権能」をもつことを前提としている²⁹。だが、意識の地平構造の発見により「表象の没落」が告知されたことで、そうした前提そのものが崩落してしまう。かくて、土台を失ったこれまでの哲学は、方向修正を余儀なくされることになるだろう。

以上より、「超越論的なものの刷新」の内実とその帰結とが明らかにされた。しかし、〈他〉を〈同〉に還元したり〈同〉から〈他〉を演繹したりすることで自己の完全なる所有を目標としきたこれまでの哲学の終焉は、すぐさま〈他〉の他性を奪いとることなく〈同〉と〈他〉とのかかわりを思考するための「哲学における新たなスタイル」の始まりを具体化してくれるわけではないだろう。だからレヴィナスは、次のように述べることで、新たな一步を踏みだすことになる。

「思惟が潜在性のうちに」必然的に含蓄されていること (*une implication nécessaire*) は、対象に向け

られた主体には絶対的に知覚不可能であり、反省において、事後的に見いだされるよりはかはない。したがって、この含蓄されていることは、現在においては生起せず、言いかえれば、私の知らぬ間に (*à mon insu*) 生起してしまう。[……] こうして、思惟において、経験論と実在論の出発点となる感覚や所与の受動性とはもはやならん共通しない根源的な被ること (*une passion foncière*) があらわになるのである。³⁰

すでに見たように、意識の地平は、さしあたりは匿名的に機能する隠蔽された領野であった。だから、顯在的な意識が潜在性のうちに「含蓄されていること」の発見は、そのつどすでに事後的なものとならざるをえない。この点から、レヴィナスは、「根源的な被ること」が意識にとって生じると帰結する。

しかし、意識の地平構造から導きだされたのは、「ノエマがそれを構成するノエシスを条件づけ保護するという構成にまつわる両義性」³¹であって、そのような意識の徹底した受動性ではなかった。さらに、そもそもフッサールによれば、「地平とはあらかじめ描かれた潜在性のことである」³²り、「未規定性のなかで、やはりある規定性の構造をもっている」³³とされる。一冊の本の知覚において、うら表紙にむけられた潜在的な予期としての志向は、空虚で未規定ではあっても、「おもてが赤ならうらも赤だろう」といったある程度の類型化された既知性のうちで生じている。意識の潜在性がまったくの空虚で未規定ではないことは、逆にむしろ、日常的な経験の安定性を保証する積極的な意義を担っている。もちろん、おもて表紙とまったく色がうら表紙に装飾されている場合、実際に本を裏返してみると、おなじ色がうら表紙にも知覚されるだろうという予期は充実されず驚きとともに「失望 (*Enttäuschung*)」が生じる、という場合は起こりえよう³⁴。だが、そのときの失望は、あくまで類型化された既知性の内部で生じるものにすぎず、主体の徹底した受動性を証したるものではないはずである。

したがって、上の一節はフッサールに基づきつつその忠実な解釈を超えたレヴィナス自身の見解と見なさなければならぬ。実際、この「ずれ」は、『全体性と無限』における地平概念からの離反というかたちで表出されることになる。具体的にはすなわち、同年に発表された「志向性と形而上学」においてすでに、フッサールは意識の潜在的な領野を結局は「対象化に従属させ、対象の超越論的な真理とは別の真理を [……]

見いだすことがない」³⁵いと批判的言及をレヴィナスは行っている。そして、『全体性と無限』になると、「古典的な観念論における概念 (*concept*)」³⁶の地位にまでこの概念は切り詰められるに至るのである³⁷。では、レヴィナスはいかにしてフッサールの着想を引き受けつつ、先に確認したような自身に固有の「超越論的なもの」をめぐる哲学を『全体性と無限』において結実させることになるのか。

3. 超越論的なものの形而上学——レヴィナスのコギト解釈

レヴィナスは、論文「志向性と形而上学」において、先のと異なる、フッサールの地平概念のうちに潜在する積極的なモチーフを、次のように簡潔に提示している。それはすなわち、「現象学は超越論的なものの形而上学 (*métaphysique du transcendantal*) を告知する」³⁸というものである。この着想は、端的には、彼岸と此岸という二世界論を前提にする「超越的なもの (*le transcendant*) の形而上学」³⁹とは逆に、此岸的な主観へと反省的に回帰しさらに此岸のうちなる彼方へつきやぶろうとする思惟の方向を言いあらわしている。そして、レヴィナスはデカルトの「無限なもの (l'idée de l'infini)」をめぐる考察にまで遡ることによって、「超越論的なものの形而上学」を具体化していくことになる。

この点を合わせると、本節の課題は次の二点に集約される。すなわち、フッサールから離れデカルトへと接近する過程で、レヴィナスはいかにして意識の地平構造から意識の根底的な受動性を導出し、また、そのことと超越論的なものの形而上学はどのように関連するのか。

まずは『全体性と無限』の序文における下の一節を検討することから議論を再開する。

[「……」本書で用いられた諸概念が提示され展開される仕方は、全面的に現象学的方法に負うものである。[……] 概念は、それを定義する思惟に属している直接的な視線のもとでとらえられている場合でも、それにもかかわらず、その素朴な思惟のあざかり知らないまま、素朴な思惟によっては気づかれていない諸地平のうちに植えつけられたものとしてあらわれる。そうした諸地平によって、概念に意味が付与されるのである。これこそがフッサールの非常に重要な (*essentiel*) 教えであった。文字どお

りととらえられたフッサール現象学において、この気づかれていない諸地平がふたたびまた諸対象を目ざす思考として解釈されようと、それはどうでもよいことだ！重要なのは、対象化する思惟がそれによって養われながらも、それ自身は忘却されてしまっている経験が、当の思惟をあふれ出してしまうという考えなのである。」⁴⁰

一節でレヴィナス自身論文「表象の破綻」の参照を促していることから明らかなように⁴¹、フッサールを再受容する過程において注目された地平概念は、「フッサールの非常に重要な教え」として『全体性と無限』にも受けつがれている。『全体性と無限』のレヴィナスにとっては、しかし、フッサールその人が対象を構成する思考の一種として意識の地平構造を解釈したとしても、それはもはや「どうでもよいこと」にすぎない。レヴィナスが受けいれるのは、対象化する素朴な思惟をそれが「あずかり知らぬままに支え、養いながらも、それ自体としては「忘却されてしまっている経験が、当の思惟をあふれ出してしまうという考え」そのものなのである。

そこでレヴィナスは、「より多くを思念する」という意識の余剰のあり方を、「私は考える (cogito)」ということをめぐるデカルトが記述した状況にまで遡行することで発展させようとする。この状況下で見いだされるものこそ、デカルトの「無限なものの観念」にほかならない。デカルトにあって、この観念は、「観念によって観念されたもの (ideatum) が当の観念を踏み越えているという点で、例外的なものである」⁴²。換言すると、この観念の例外性は、無限なものの観念においては、「観念されたものと観念 (idée) とを分離する隔たり」こそが「観念されたものそれ自体の内容をかたちづくっている」⁴³ということのうちに存するのである。確かに、意識の地平構造も無限なものの観念も共に「思惟するよりも多くを思惟する」⁴⁴という点では、つまり思惟が余剰を含むという点では形式的な類似性が認められる。だが、フッサールにおいては意識の潜在性は結局のところ意識の顕在性に従属する役割しか与えられないのに対し、デカルトにおいては、「観念されたもの」と「観念」とが隔たり続けるという点で、言いかえれば、観念されたものが観念に対し徹底して非適合的であるという点で、両者は決定的に区別されねばならない。フッサールの言葉で両者の対比を明らかにすれば、顕在的な意識が潜在的な意識を含むのではなく、逆に、顕在的な意識が潜在的な

意識に含まれるという意識の受動的なあり方が、この観念によって示されることになる、と言えるであろう。だから、無限なものの観念は、「その存在について思考する者に対して完全な外部性をたもちつづける存在との関係を示している」ことになる⁴⁵。レヴィナスはこのように意識の地平構造を徹底化させることで、〈同〉を絶対的に超越しつつも〈同〉とかわるような〈同〉と〈他〉の関係を積極的に語る視座を獲得したのであった。

だが、こうした点を見ただけでは、レヴィナスはたんに意識を形而上学化したにすぎないことになろう。またそもそも、観念に対する観念されたものの徹底した余剰を主張しただけでは、無限なものの観念そのものの理解としても不十分である。というのも、両者の間の不均衡は、たんに単に一方が他方より大きいとか、より多くの性質を含むとか、より完全で豊かであるなどといった静的状態ではなく、無限がその観念に捉えられつつも同時に、そこに収まりきらず、境界を押し広げ破壊しては、観念を溢れ出てゆく「働き」を意味しているからである⁴⁶。そこで、デカルトへの遡行が「超越論的なものの形而上学」を具現化することを示すためにも、レヴィナスが「無限化 (infinition)」⁴⁷と呼ぶ、無限の観念が有限な存在者である私のうちに生起するその動的な様相についてさらに見ていかねばならない。

無限なものの観念は、「私は考える」というコギトの状況と不可分である。すなわち、「《私は考える》において、「どのようにしてもそれが内包することができず、じぶんがそこから分離されている《無限なもの》と関係を取りむすぶ」⁴⁸。デカルトの用語では、この「《無限なもの》」は「神」を意味することは周知の通りであろう。だが、レヴィナスの目をひくのは、有限な被造物たる自我が無限なものの観念を思考するのは現実に無限である存在者によってこの観念があらかじめ置かれているからだということを示すことで、神の実在を証明しようとするデカルトの推論の論理的形式やそれを支える因果的議論ではない⁴⁹。むしろ、レヴィナスが着目するのは、『省察』における議論の道筋のあり方のほうである。神としての無限なものの観念が「コギトの明証」⁵⁰を支えているにもかかわらず、「省察の時間的な運びからすると、コギトのうちに神にたいするこの形而上学的な関係が発見されるのは、哲学者の第二の歩みにあってにすぎない」⁵¹。より具体的には、『省察』においては、方法的懐疑のすえ、私がみずからを何ものと考えている間は私は存在す

るという命題は必然的に真である、ということが示されるのは、「第二省察」である。これに対し、そうしたコギトの存在の明証を保証するのは無限なものとしての「神」であることが証明されるのは、後続する「第三省察」においてである。コギトの明証はそれを支える無限なものによって基づけられているのであれば、論理の順序としては、第三省察の内容が第二省察の内容にとってかわられねばならない。にもかかわらず、こうした基づけ構造そのものの発見は、基づけられたものの発見に先だたれてしまうのである。レヴィナスはこのようなデカルトの論の歩みのうちに、「《論理的》秩序とは区別される時間的な秩序」⁵²を見いだしながら、次のように語っている。

「要するに、存在は一挙に存在するわけではない。存在に先だつその原因もまた、なおも到来するものである。存在することの原因は、あたかもその結果よりもあとから来るものであるかのように (*comme si*)、結果から思考され認識されるからである。[……] 思考においては、〈よりあと〉 (*l'Après*) あるいは〈結果〉 (*l'Effet*) が〈よりまえ〉 (*l'Avant*) あるいは〈原因〉 (*la Cause*) を条件づけている。〈よりまえ〉は思考に対してあらわれ、そして思考によって迎え入れられるだけである。」⁵³

「よりあと」が「よりまえ」を、「結果」が「原因」を「条件づける」という事態は、「論理的には不条理な逆転」⁵⁴であろう。それどころか、もっと悪いことには、ただの「錯覚 (*illusion*)」⁵⁵にすぎないとみなされうる。例えば、ある芸術家が一枚の肖像画を描くとする。そのときできあがった肖像画は、「モデルの顔つきや芸術家の人となりやパレットに溶かれた絵具から説明がつく」⁵⁶と言われるかもしれない。つまり、モデルの顔つきや芸術家の人となりが「原因」となり当の肖像画が「結果」として描かれた、と説明されるかもしれない。だが、「説明の材料は知れていても、それでもって肖像画のできあがりを精密に予見することは誰にも、当の芸術家にだってできなかった」⁵⁷はずであろう。そうであるとすれば、結果としてできあがった肖像画から条件づけられた原因は、ひとつの「回顧的な錯覚」によって産みだされたものにすぎないことになる。レヴィナスはしかし、コギトと無限なものとの関係にあっては、このような錯覚も「理由のないものではない」⁵⁸し、「《本当のこととは思えない (*invraisemblable*)》この現象は、存在における転回

(*révolution*) として解釈されねばならない」⁵⁹と切りかえず。言いかえれば、レヴィナスは、このような錯覚にすぎないとおもわれる否定的な事態を、逆に「ある積極的な出来事」⁶⁰としてとらえかえそうとするのである。それでは、こうしたレヴィナスの主張にはどのようなロジックが隠されているのであろうか⁶¹。

確かに、無限なものはコギトの明証を支えている。ということは、無限なものはコギトの明証に先だっている。そうだとすれば、コギトの明証の発見に先だち、無限なものについての観念を抱くことが、少なくとも論理的には、担保されることになるであろう。だが、レヴィナスは、「無限な存在体 (*entité*) の生起 (*production*) を、無限なものの観念から切りはなすことはできず、「無限なものはまず存在し、そのあとで (*ensuite*)、啓示される (*se révéler*) のではない」⁶²と言う。だからといってもちろん、無限なものとコギトの基づけ構造からして、無限なものはまず私にとって「啓示され」、そのあとで「存在」することになるわけでもない。つまり、無限なものの現われとその存在とは、前者が後者に先だつたのも後者が前者に先だつたのもないのである。そこで、無限なものの存在とその私にとっての啓示とが不可分であるということ、無限なものがコギトに先だちその明証を基づけるという一見すると相矛盾する二つの主張を両立させるためには、次のように考えなければならぬだろう。私と無限なものは、すでにして、かかわってしまった。だが、そのかかわりは、実際に無限なものについての観念が私のうちに生起し、無限なものが私にとって啓示されることに先だつ、いわば「存在の手前」と表現されるような次元において生じている⁶³。だから、無限なものと私とのかかわりは、つねに、忘却という仕方ではなされるよりほかない。しかし、この忘却は、通常の「忘却」とは区別されなければならない。というのも、普通「忘却」の対象となるのは、かつて実際に私が経験したことがらであろうが、無限なもののかかわりは、私の実際の経験に先だつてすでにとりむすばれてしまっているからである。したがって、起源を欠いたまま忘れさられた無限なものと私とのかかわりは、「本当のこととおもえない」「錯覚」としてのみ生起する。このことは、けれどもより積極的に言えば、いわば無起源的に忘却されていた無限なもののかかわりにたいする私の「覚醒 (*réveil*)」⁶⁴でもあることになるだろう。レヴィナスはこの「覚醒」としての無限なものの観念の生起を「存在における転回」と呼んだのではないだろうか。

以上から、無限なものの観念は、「先だつものが後からくること (la postériorité de l'antérieur)」⁶⁵として私のうちに生起することで私を覚醒させることが明らかにされた。ここにおいて、「超越論的なものの形而上学」の内実を描出するための用意が整ったことになる。本節冒頭で引いた一節にあったように、対象化する素朴な思惟をあふれ出るのは無限なものの観念にほかならない。この観念される無限なものは、そうした素朴な思惟を支え、養うという仕方ですとかわっているという点において、実際に無限なものの観念が私を抱くことを可能ならしめる超越論的なものであることになる。だが、無限なものの観念が私のうちに見いだされるのは、実際にこの私が無限なものと関係をとるむすぶことで成就される「すぐれた意味での経験」によってのみである。より端的に言えば、超越論的なものは経験よってのみ見いだされる、という事態が無限の観念の生起においては成立していることになる。

しかしすると、すでに成就された無限の経験から遡及して実はこの私のうちに無限なものとのかかわりがあったのだとレヴィナスは言おうとしただけなのだろうか。もしそうならば、レヴィナスによって見いだされた超越論的なものは、経験的なものたんなる転写にすぎないことになってしまうのではないだろうか。

こうしたありうべき反論に答えるためには、無限なもののかかわりが、起源を欠いた忘却からの覚醒という仕方です後的にのみ私に経験される、という点についてさらに考察しなければならない。無限なものとの私とのかかわりは、通常の素朴な意識においては、必然的に忘却されており、無限なものの観念が実際に私のうちに生起するという事は、この忘却されていたかかわりを覚醒という仕方です経験することであった。ということは、無限なものの経験にあつて、超越論的なものと経験的なものは内容上は同一であることになるだろう。この点は次の二点を帰結する。まず、現に私のうちに生じた経験によってのみ超越論的なものが見いだされるということ、つまり「先だつものが後からくること」は、無限なものが私にとって経験されるそのされ方そのものを言いあらわしているのであつて、経験のうちに見いだされるものを秘密裏に超越論的なものとして詐称するわけではないと考えることができるようになる。次に、無限なものについての経験は、私の現在において、事後的に、遅れとしてのみ生じ、私は無限なものについての経験を現在において生きることが不可能であるのだから、遅れにおいてのみ

経験される無限なものは、私にとって、突発的に、被るという仕方です受動的に生じるということにもなるのである。

このように、レヴィナスにおいて無限なものとしての超越論的なものとは、私が存在することそのものにおいてかかえこむアプリアリな次元に位置づけられる。だが、それはたんに経験的なものと対立し、その可能性を条件づけるものではなく、私のうちに、超越論的なものが、無限なものという徹底した外部へと開かれていることで、私にとっては、事後的で受動的にしか生じえない新たなものへの経験の可能性を私に用意するものなのである。

4. おわりに——今後の課題

以上、『全体性と無限』において、フッサールの意識の地平構造のうちに潜在する、超越論的なものとのさらなる新たな規定を、つまり、「事後的」にのみ、主体にとって「根底的な被ること」として生起する超越論的なものについての着想を、デカルトの無限なものの観念を経由しつつ「超越論的なものの形而上学」としてレヴィナスが具現化するさまを明らかにしてきた。

だが、『全体性と無限』においてレヴィナスは、デカルトとは異なり、無限なものの観念は誇張的な懐疑を経てコギトの明証へといたる道程の果てにおいて見いだされるとするのではなく、「具体的には顔との関係という相のもとに生起する」⁶⁶と考える。そうであるならば、前節までの議論もまた、顔をかいしてみずからを表出する他者と私とのかかわりのうちで具体化されねばならないことになるだろうが、この課題を遂行するためには、また別の稿を用意せねばならない。そこで、本論での議論がどのようにしてレヴィナスが記述する他者経験において具体化され、またどのような新たな解釈をそこから導きだすことができるのか、という問題は課題としてここに提示するととどめ、『全体性と無限』における超越論的なものあり方について確認したところで稿を閉じることとする。

(指導教員 川本隆史教授)

【註】

※レヴィナスの著作から引用する際は以下の略号を用いる。引用に際しては邦訳を参照したが、特に断りなく訳を変更させていただいたこととお断りしておく。なお、邦訳の頁数は原著の頁数の後の()内に付し、中略ないし引用者による補足は[]

内に記した。また、引用文中の傍点は特に断りのない限り原文の強調を反映している。

EDE ; *En découvrant l'existence avec Husserl et Heidegger*, édition suivie d'essais nouveaux, Paris : J. Vrin, 1967 [3e éd., 2001]. (『実存の発見——フッサールとハイデッガーと共に』, 佐藤真理人ほか訳, 『叢書・ウニベルシタス』522, 法政大学出版局, 1996年。)

TI ; *Totalité et Infini. Essai sur l'extériorité*, « *Phaenomenologica* » 8, Den Haag : Martinus Nijhoff, 1961 [4e éd., 1980]. (『全体性と無限 (上) (下)』, 熊野純彦訳, 『岩波文庫』, 岩波書店, 2005年。)

EI ; *Éthique et infini. Dialogues avec Phillippe Nemo.*, Paris : Librairie Arthème Fayard et Radio-France, 1982.

DQVI ; *De dieu qui vient à l'idée*, Paris : J. Vrin, 1982 [2e éd., 1986].

EN ; *Entre nous. Essais sur le penser-à-l'autre*, Paris : Bernard Grasset, 1991.

1) Jacques Derrida, « Violence et métaphysique », in : *L'écriture et la différence*, Paris : Seuil, p.224. ; Jan de Greef, « Empirisme et éthique chez Lévinas », in : *Archives de philosophie*, n° 33, 1970, p.223-4. もつとも、以下に述べるようなレヴィナスの「経験主義」に対し、デリダは批判的であり逆にドゥグレフは肯定的な評価を与えている。

2) TI, p.xiii. (上23頁。)

3) TI, p.170. (下34頁。)

4) TI, p.xiv. (上24頁。)

5) Cf. TI, p.8, 95, 98, 143, 179ff. (上51, 240, 246, 346, 下55, 57, 59-60頁。) 例外的に肯定的な意味で用いられているのは、対象の構成に従属するのではない「感受性」の「超越論的」機能を論じる文脈 (TI, p.162f. (下16-9頁)) と、『全体性と無限』において採用される「超越論的」方法について言及する箇所 (TI, p.xiii (上22頁)) である。前者について、「感受性」に関するフッサールの論がレヴィナスに与えた影響を追跡したものとしては、以下の論考が参考になる。John E. Drabinski, *Sensibility and Singularity. The Problem of Phenomenology in Levinas*, Albany : State University of New York Press, 2001, Chap. 3&4, esp. pp.67-81. ; Yasuhiko Murakami, *Lévinas phénoménologie*, Grenoble : Jérôme Millon, 2002, p.26-34. 後者については、次の論考が参考になる。Theodore de Boer (trans. by Alvin Plantinga), "An Ethical Transcendental Philosophy", in : Richard A. Cohen(ed.), *Face to Face with Levinas*, Albany : State University of New York Press, 1986, Chap. IV.

6) Cf. Jacques Collet, « Lévinas et la phénoménologie husserlienne », in : J. Rolland (ed.), *Les Cahiers de La nuit surveillée*, n° 3, Lagrasse : Verdier, 1984, p.25f. ; Jan de Greef, « Lévinas et la phénoménologie », in : *Revue de métaphysique et de morale*, vol. 76, n° 4, octobre-décembre, p.461.

7) EDE, p.176f. (204頁。)

8) Edmund Husserl, *Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge*, *Husserliana*, Bd. 1, Den Haag : Martinus Nijhoff, S.83. (『デカルトの省察』, 浜渦辰二訳, 『岩波文庫』, 岩波書店, 2001年, 91頁。) なお、当該邦訳書は、フッセリアーナ版ではなく哲学文庫版を底本としており、両者のあいだには強調箇所などについて若干の違いが認められるが、引用に際してはすべてフッセリアーナ版に従った。

9) Ibid., S.82. (87頁。)

10) Ibid. (88頁)

11) Ibid., S.84. (91頁。)

12) Ibid. (同頁。)

13) Ibid. (同頁。)

14) Ibid., S.81. (87頁。)

15) Ibid., S.84. (92頁。)

16) EDE, p.182. (210頁。)

17) EDE, p.181. (209頁。)

18) EDE, p.182. (209頁。)

19) EDE, p.182f. (211頁。)

20) EDE, p.183. (同頁。) 他にレヴィナスは、「感受性」、「大地」、さらにはハイデッガーに言及しつつ「存在」を例として挙げている。

21) Ibid. (同頁。)

22) EDE, p.183. (212頁。)

23) EDE, p.181. (209頁。)

24) EDE, p.180f. (209頁。)

25) EDE, p.181. (同頁。)

26) EDE, p.179. (207頁。)

27) EDE, p.187. (216頁。)

28) Ibid. (215頁。)

29) Ibid. (216頁。)

30) EDE, p.182. (210頁。)

31) EDE, p.186. (214頁。) 傍点は引用者による。

32) Edmund Husserl, op.cit., S.82. (88頁。) 傍点は引用者による。

33) Ibid., S.83. (89頁。)

34) 「失望」についてのより詳細なフッサールの記述については以下を参照。 Edmund Husserl, *Erfahrung und Urteil. Untersuchungen zur Genealogie der Logik*, red. und hrsg. von Ludwig Landgrebe, « Philosophische Bibliothek » 280, Hamburg : Felix Meiner, 1999 (7 Aufl.), S.94ff. (『経験と判断』, 長谷川宏訳, 河出書房新社, 1975年, 76頁以降。)

35) Ibid. (同頁。) この点に関して、レヴィナスは、カントの『純粋理性批判』における「感性 (Sinnlichkeit)」と「悟性 (Verstand)」との分離という発想を念頭に次のように述べている。「カントは超越論的な活動性を直観的なものとして解釈することを拒んだ。この拒否により、超越論的なものが、何も他なるものを目指さない主観の内部性のうちに閉じこめられることになるのである。カントは、超越論的なものを対象的なものの外部に維持しようとするのだ。[……] この点においては、カントはフッサールよりも大胆なのである」 (EDE, p.192. (221頁。)) 実際、フッサールよりもカントがレヴィナスに与えた影響を強調する見解もあるが (Olivier Dekens, « Le Kant de Lévinas. Notes pour un transcendantalisme éthique », in : *Revue philosophique de Louvain*, Tome 100, Numéro 1-2, février-mai, 2002, p.118f.) ここではふれない。

36) TI, 15. (65-6頁。)

37) Cf. 関根小織『レヴィナスと現れないものの現象学—フッサール・ハイデッガー・デリダと共に反して—』, 晃洋書房, 2007年, 27頁。

38) EDE, p.191. (220頁。)

39) Ibid. (同頁。)

40) TI, p.xvi-xvii. (上30頁。)

41) TI, p. xvi, note 2. (上31頁。)

- 42) TI, p.19. (上75頁。)
- 43) TI, p.20. (上76頁。)
- 44) EDE, p.182. (210頁。)
- 45) TI, p.20f. (上78頁。): 傍点は引用者による。
- 46) Cf. 中真生「レヴィナスにおける「無限の観念」と「内在の超越」」, 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室編, 『論集』, 第24巻, 2005年, 所収, 56-7頁。
- 47) TI, p.xiii. (上23頁。) なお, レヴィナスは後年のある質疑応答のなかで, 「無限 (infini)」の 'in-' という接頭辞は, 「有限 (fini)」の否定のみならず, 有限の「中 (dans)」での「触発 (affection)」を意味すると語っている (DQVI, p.150。)
- 48) TI, p.19. (上75頁。)
- 49) Stéphane Mosès, « L'Idée de l'infini en nous. Pour Emmanuel Lévinas », in : *Emmanuel Lévinas. L'éthique comme philosophie première*, Paris : Cerf, p.80. (「われわれのうちなる無限の観念——エマニュエル・レヴィナスのために——」, 谷口博史訳, 『思想』, No. 874, 1997年, 所収, 214頁。)
- 50) TI, p.25 (上87頁。)
- 51) Ibid. (同頁。)
- 52) Ibid. (同頁。)
- 53) Ibid. (87-8頁。)
- 54) Ibid. (上88頁。)
- 55) Ibid. (上87頁。)
- 56) Henri Bergson, *L'évolution créatrice*, « Quadrige », Paris : PUF, 1941 (4e édition, 1989), p.6. (真方敬道訳『創造的進化』, 岩波文庫, 岩波書店, 1979年, 27頁。)
- 57) TI, p.25. (上87頁。)
- 58) TI, p.25. (上87頁。)
- 59) Ibid. (上88頁。)
- 60) Ibid. (上87-8頁。)
- 61) 本論とは観点がずれるが, 中は当該の問題を神による人間の「創造」の問題との関連で解明している (中真生「主体の被造性 (créaturalité) —依存における自律—」, 哲学会編『哲学雑誌』, 有斐閣, 2006年, 所収。)
- 62) TI, p.xiv-xv. (上26頁。) なお, 引用文中で登場する「生起」という事態と関連して, レヴィナスは次のように述べている。「生起という語が示しているのは存在の実現 (effectuation) であり (出来事が《起こる (se produire)》, 自動車が《生産される》), 存在が光のうりにもたらされ (mis en lumière), 顕わになるということ (exposition) を (論拠が「提示される」, 俳優が「登場する」といった用例に見られる) 示している」 (TI, p.xiv. (上25頁。))
- 63) これはよく知られているように, 『存在するとは別の仕方』において, 「存在の彼方」とともにしばしば用いられるレヴィナス固有の表現であるが, 『全体性と無限』においてレヴィナスが「形而上学は存在論に先だつ」というテーゼを打ちだしたとき, すでにそうした後年の発想が芽生えていたことがここでの議論から示唆されるであろう。
- 64) TI, p.58. (上160頁。) この「覚醒」という概念は, 「目覚め (éveil)」とあわせ, レヴィナスの後年の思惟にあって特に重要な意味をもつ。例えばDQVI所収の論文「意識から目覚めへ——フッサールから出発して」やEN所収の論文「哲学と目覚め」などを参照。
- 65) TI, p.25. (上88頁。)
- 66) TI, p.170. (下33頁。) 後年のある対談においてレヴィナス自身が語っているように (EI, p.86f.), デカルトは無限なもの観念を知の秩序のうちでとらえているのにたいし, レヴィナスは, 他者との倫理的な関係のうちこの観念の真価を見ている。